

【針供養】
十二月八日、女のいる家では麿針を菟蓐こんぱくにさして路傍に捨て、ご馳走を作ってお祝する。針子をとっている師匠の家ではこの日針子一同にご馳走をしたものである、十三日は奉公人の出替り日、二十日前夜には村の年末総会が得月院で開かれる。

一ヶ年間のいろいろな決算報告や明年の村役員選挙などをするのだが昔は村人の階級がはっきりしていて総集会のときも頭分は座敷に、百姓分は口の間に、小屋敷分は庭に蓐を敷いてその上に座を占めたものである。そして大体のことは頭分で取りきめ百姓分が多少相談に預かるといった形、小屋敷分は仰せごもともどと服従するだけであった。村金を借用して返済してないと、この日庄屋の前に呼び出され「いつ返すのか」と催促される、どうしても返済できないときは「床落」という処分に附せられる、床の上で起居することができず土間へ藁わらを積んでその上に蓐を敷き起居しなければならぬのである。この「床落」は明治維新ころまでつづき明治の中ごろからは畳を敷かぬことに改められ最近ではすっかりあとを断った。二十四日は得月院で念仏納め、二十五日から

二十九日までの間に迎年準備をする、餅つきは殆んど二十八日に行はれた。最後の日は大節季一ヶ年間の総決算満期でこの家も多忙を極めたものである。

おはり

- (註)
- ① 屋代弘賢 (称) 弥太郎・太郎吉・大郎 (名) 詮・虎・詮賢・詮文・(号) 輪池 (師) 堀保己一ほか 天保十二没(一八四一) 八四才 江戸
 - ② 石原正明 (称) 喜左衛門 文内 (名) 将聴 (号) 蓬堂 (師) 堀保己一ほか 文政四没(一八二一) 五八才 尾張生 江戸住
 - ③ 越谷吾山 俳人 (姓) 会田 (名) 秀真 (号) 師竹庵・古庵庵・涼華坊 (師) 佐久間柳居 沾山 天明七没(一七八七) 七一才 武蔵越谷生
 - ④ 喜多村筠庭 (称) 彦助・彦兵衛 (字) 節信 (号) 筠居・筠庭・静斎・静舎 安政三没(一八五六) 七三才 江戸
 - ⑤ 喜田川季莊 (別名) 尾張部守貞 (本姓) 石原氏 (名) 喜蔵 文化七生(一八一〇) 大阪生・のち江戸住 没年不詳
 - ⑥ 牧野以成 第七代丹後田邊藩主 天明八(一七八八) 江戸生 文化元(一八〇四) 家

督叙従五位下任豊前守 (名) 直太郎 (号) 益斎 文化十年外柰田御門番被仰付 天保四没(一八三三) 四六才

⑦ 風俗問状奥書
屋代弘賢等が版行した「風俗問状」の奥書には「右諸国風俗は編集の節御答被下候人々の御名をも書加へ申候間、御答書の末に国郡郷町、御苗字俗名実名姓別まで委細に御記し可被下候也 屋代大郎源弘賢」と記す

⑧ 浜村年中行事
本年二月市内字浜所在の得月寺から出版された「波照山得月寺と浜村」(西村繁三郎氏)の中にも年中行事についての記述があるので参照され度い。

(完)



一色義遠の父子関係

一、一色吉原四郎義遠

『満濟准后日記』「永享四年(一四三二)正月恒例松拍子(歌舞)ニ際シ一色修理大夫(義範)子息兵部少輔(義直)打太鼓、二男(義遠)打小鼓」と見えるので、兄義直とは年の差は下世話の喧嘩兄弟でさほどなかったと推考される。ところが江戸時代の作と云われる『応仁武鑑』では兄義直は、永享三年(一四三一)生れとされている。現場被見の満濟日記とは尠くとも十歳ぐらいのずれはあるようだ。一説には、義直公は応永二十九年(一四二二)生れで元龜三年(一五〇三)八十一歳で卒したとの話も承わる。嫡子義春の誕生は文正元年(一四六六)で、父義直が永享三年生れれば義直三十五才の時出生となる。やはり永享三年説が一応妥当のようだ。本命の義遠の誕生にふれたものはないようだ。

岡野 允

以上縷々のべたとおりで、義直兄弟の生年については疑点も残るが、ここでは史上定説どおり一応兄義直永享三年(一四三一)と認め、お粗末ながら弟義遠は五歳違いの永享八年(一四三六)に仮定する。ちなみに歿年も定かではないが、明応二年(一四九三)正月將軍義植の犬追物には供奉している。これが公式の消息終りで、還暦前後の年頃で故旧の吉原山に退隠したのではなからうか。

二、義遠の子息等

丹後の諸旧記では義遠(或は後年義清に改名ともあるが不詳)の子息とされるものが数名ある。

- (1) 義季 (義有は異名同人と見られていた)
- (2) 義清
- (3) 義信

三子について以下論究する。

(1) 義季
『細川大心院記 式目雜録』丹後国貢廿四種「永正元年(一五〇四) 甲子部臣大江越中、小西石見奉献 一色義季造病氣」

(1) 義有
『田辺旧記』丹後郷土史料集第二輯所収 P362
「文明九丁酉(一四七七) 九月 義直所領三河代官東條国氏叛するにより、甥義有を遣りて国を収む」

「明応十辛酉(一五〇一) 三月若州武田信賢の遺子元信將軍義澄より丹後守護に補せられ加佐郡に入る。義遠之を逐ひ斥け男義有を三河より召還して宗家を継がしめ(後略)」

『峯山旧記』(同右) P700
「兵部少輔義遠従兄一色八郎持長の後を承けて丹波郡吉原城にあり、文明九丁酉(一四七七) 一色家領三河国守護代東條国氏叛するに因り、吉原四郎義遠子息左京大夫義有を伴ひ出陣、国氏を逐ひ義有を同国の鎮として吉原に帰る。」

義有帰国に関しては『田辺旧記』に全じ。この義有が文明九年(一四七七) 三河へ出陣当時幾歳であったか詳らかではないが、おそらく元服前後の年ばえではなかったか。そうすると寛正四年(一四六三) 前後の誕生と

推算され、父義遠三十才前後の生れとなる。
また丹後に帰国の明応十年(一五〇一)は四十歳ぐらいで、父義遠も最早六十路半ばの老人である。

ところが現実には第七代義有は永正九年(五一二)七月九日、行年二十六歳で府中館で病死した。逆算して長享元年(一四八七)の誕生である。所謂父義遠五十すぎの子となる。それでもあえておかしくはないものの、さきに触れた三河出陣にいう義有と同人にしてはいささか間尺にあいかねる。

【仮定】
そこで便法として大胆な推定であるが、三河国に赴いたのは実は義有ではなく義季であったと読み替えたなら如何なるか(同人説は一応伏せる)。

義季は文明九年(一四七七)、元服前後の身を以て父義遠に伴われ三河国に出陣した。そうして滞在約二十五年文龜元年(一五〇一)頃、先代義直死去蹟目の問題で召還されたが、正に齡初老の域に達していた。

そうして帰国に際しては、三河生れの嫡男義有(十五歳)も帯同していたと賭られる。(逆算長享元年(一四八七)生れ) 時に「一色義季造病氣」の体で、一門や重

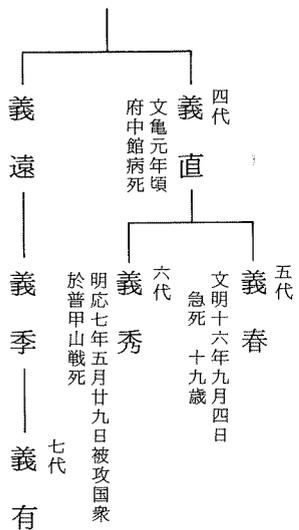
臣層も按じた様子だが、幸いに嫡子義有が直ぐ立てるので、人知れず身を引いたと拙考。しかし或いは病重り病歿とも。

【傍証】

1. 義季に関してにはさきに屢々言及したとおり「永正元年(一五〇四)部臣大江越中小西石見奉獻、一色義季造病氣」より管見にはない。

2. 史上義有の初見とされるのは「細川大心院記」永正二年(一五〇五)春條に「武田伊豆守元信丹後入国(中略)、雖然一色五郎義有方ヨリアツカワル(後略)」と見える。

義季が病死したともまた義有と改名したとも傍証もなく何等説明も聞知しない。 図示すると



時勢を諷刺した長歌狂歌集
『金言和歌集』明応年間(自一四九二或ハ明応二年)詠歌集とされる。群書類従33輯下所収(近時吹田市片岡秀樹氏「一色氏論稿」にて示唆を受く)

「応仁の一乱は、しかしながら山名金吾宗全入道と、一色修理大夫義縁とちかつきたるによって連々あひし、畠山右衛門佐義就を吉野のおく天川よりよびいたし時のくわんれい(管領)、左衛門督政長にめんほく(面目)をうしなわせ侍りしも、とりわけ此両家のちやう行にて侍り、そのしさい世にかくれなし、さよのむくひ(報)によりて、きよふ(京)に侍りし嫡子左京大夫(義春)、ふしきのふしにあひ、ついになくなられ侍りつ、しやてい(舎弟)の吾郎(義秀)おいとのあらそひによって、丹後国のともからとも、とりあひけるとなん、かよふなる事も、うき世はめぐる小車の(後略)」

【備要】

「北野社家日記」などの史料により推測すると、義直が殊のほか目をかけていた伊賀氏の弟が義直の孫を推戴して義直父子に反旗をひるがえし、丹後国人も両派に分れ相争った

(片岡氏注)と云う。義秀は南禅寺派寺院の侍者僧籍に在ったが、文明十六年(一四八四)丹後守護中兄義春が急死したので還俗した者で襲代にあたり守護代延永春信や有力国衆伊賀次郎左エ門一家なども反対派であったと云う。

しかしこのときの家督争いに三河国在の義季等が如何ように係わったかは不詳。

(2) 義清

先代義有とは擁立する重臣国衆も異なるよう、誰の子かも決め手はない。永正九年七月義有歿後後釜が決まらず紛糾をつづけていたと賭られる襲代争いも、約四年後遂に守護代延永春信は一度立てた義清を逐い一色九郎元清を擁立した。片や義清も石川直経に立てられて雌雄を決する事となった。決局丹後国内で優勢な延永軍に同十四年(一五一七)六月に加屋城は落され援を救めて若州に走った。そうして幕府と越前勢の後楯のある若狭守護武田氏を頼った義清・石川側は勝ち、同年九月六日に加屋城に入ることが出来た。

愚生はそれより約二十年後の丹後国の在姿を写したとされる天文七年(一五三八)筆の『丹後国御檀家帳』に見える石川の一宮殿様

は八代義清の後身だと推測するものである。

義清と石川一宮殿との相似点は御檀家帳にも見える如く「石川殿御取立の屋方也」が第一である。

次に同帳府中一宮殿様のところでは「是は石川の御屋方様の御子息様若狭武田殿甥子様・国のおとな衆と申合せ御家督持たせ申され候」がある。

数世宿敵の丹、若両国間にあっては、たとえ政略結婚にしても両守護家間に縁談が成立したのは、永正十四年の合戦後丹後守護代延永氏並びに若狭武田氏の一門ながら、敵視された逸見氏がともに一時的にもせよ内外に勢力を失った時点ではなからうか。この時双方とも一門・国衆らに多少の異議あっても衆議は成り立つ時期だ。なお文龜(一五〇一)一五〇四)以来対武田氏周旋方は石川直経が最適であろう。

(3) 吉信について

『峰山旧記』「文龜元年(一五〇一)八月父義清(義遠)与謝郡石川城に移りて国主を後見するに当り、出城(成願寺城)に家臣を遣し義信は吉原山に帰り、吉原越前守義信と名乗り(一説義貞)奥三郡に令す。」

この文龜元年(一五〇一)はさきに義季の項(1)で検証したとおり義遠は六十路なかばの老齢であり、生存も不詳の有様であった。右記事は、前後の文脈からみて御檀家帳を重宝するあまり、同帳の石川一宮殿様(第八代左京大夫義清)と吉原四郎義遠とを混全し同一人物と見做した錯誤によるものと愚考する。

ただし記事をはなれて系図上義遠の子義信が吉原城主を継いだ、永正十一年(一五一四)八月但州山名の兵熊野郡久美浜に乱入す、氏家勢、吉原城義信の下知に従がい防ぎ戦い但州軍敗軍、とあればそれでもよい。

丹後国御檀家帳

度会神主 福井末高 (抄)

天文七年(一五三八)の古帳也

標記のうち「一宮殿様一家」

「一、ふちう

一宮殿様

はいし川の御屋かたさまの御しそくと存候、わかき武田殿おい子と存候、くにおとな衆と申合、御かともたせ被申候、一の宮殿の本城二御座候 延永殿 (以下略)

〔校考〕
父の結婚時点より勘按して十五歳より二十歳ばかりではなからうか。しかし実名は何方であろうか。何等の書証も見出し得ない。丹後史上では諸旧記は凡そ義幸説であるが、義幸にしても敵方若州方にも戦闘記事は散見しても名前は見当らず、証蹟はなく幻の人物である。

丹後旧事記ほか諸旧記では、義幸退隱は永祿元年（一五五八）で子息義道継ぐとしており、本帳時点からして治城約二十数年と云う勘定となる。

一、石川
一宮殿様
是は石川殿御取立の屋方也、ふちうの御屋かたさまの御しんぶ也、御婦八原と申所御座候

〔校考〕
この石川一宮殿様は、永正十三・四年（一五一六・七）に一色九郎元清と家督を争うた第八代義清が隠退した方だと推定している。年は五十歳前後でもあろうか。
若狭武田氏女を娶った時は、永正十四・五年頃との推論をさきにのべた。ところで、こ

の左京大夫の公式消息は永正十六年（一五一九）で終り初なりの感が深い。
『幕府御内書案』には「二月將軍義植は一色義清に年始祝儀に対する返礼を出す」と見ゆ。しかしこのあとは亦多事である。
『若狭羽賀寺文書』「天文四年（一五三五）十一月一日丹州加佐郡田辺陣立」「同五年五月二十二日敵方田辺城陥落の事」
パトロン石川直経は、天文十三年（一五四四）三月二日竹野郡嶋津高屋城が落城し消息を絶ち、その子息小太郎も同日伊賀氏のためか中郡五箇城で討死している。義清もその後政治的生命を絶たれたのではないかと云われている。

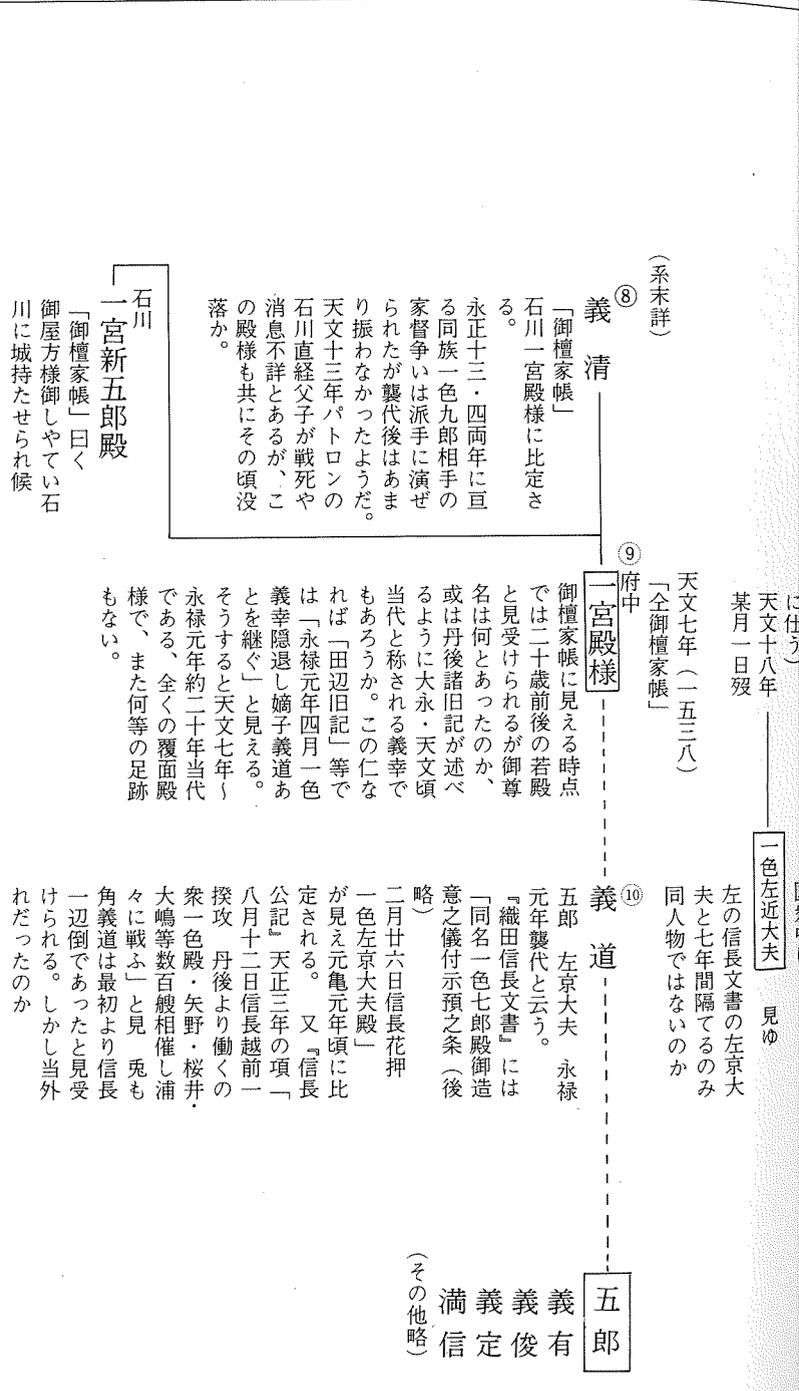
同石川
一宮新五郎殿
御屋方様御しやてい石川二城もたせられ候

〔校考〕
ふちう一宮殿様の弟と思われるが、この後如何に。
竹野郡
一、しやうかん寺
一宮殿様

是ハ三河国より御のほり候御屋かたさまに候、まへの御屋かたさま御子なく候て、三河へ御ゆいにて候へ共、御内衆御しゆんくわいにて、竹野郡しやうくわん寺と申候城に御座

〔校考〕
さきに義季、義有父子説を唱え詳説したとおり、明応十年（一五〇一）ごろ義季は嫡子義有を伴って三河国より帰国し、直ちに義有は一色家を襲代した。そうして何時のころか男子を儲けた。が種々の事情を遠慮してのとか、自分の出生地三河国の故旧一門のもとへ幼児を託した。しかし、永正の末年から大永・天文の頃の三河国は、故国とはいえ一色を容れる地ではなかったようだ。そこで国元の国人は合議のすえ旧主の遺児を温かく迎え入れたものとす。義有永正元年（一五〇四）同九年（一五一二）の七・八年中の出生と仮定すると天文七年（一五三八）時には三十歳、十一・三歳位か。

〔付記〕
（実は「帳」曰、「まえの御屋かたさま御子なく候て三河へ御ゆいにて候へ共」云々が年末候につかえて飲み下しかねていたが、義有三河生れ説を得てまづ鶴呑みにした次第である。〔昭和六十一年六月末成稿〕



持範と同人説も有
左京大夫 永享六年歿 享年三十四才

初範親 左京大夫 伯父義貫大和陣中で誅殺後、義教將軍より伯父の旧領丹後を賜う。けだし伯父横死後遺臣鎮庄には將軍の協力を負う。宝徳三年十一月二十八日頓死 行年三十三才

義孝 義道

〔注〕「田辺旧記」に云う。永祿元年（一五五八）義幸隠退して嫡子義道その後を継ぐと。教規死後約一〇年が経過してあり、愚生はその系譜をみるかぎり、義孝と義道とは父子ではなくその間二代ほど欠けているかと想察する

一色系譜

(拙自修)

② 義貫 五郎 初義教 左京大夫 若狭・三河・丹後守護 永享十二年五月十四日 於大和陣中 義教將軍 の討手 武田信榮・信 賢兄弟に討たる

④ 義直 五郎 左京大夫 宝徳三年十一月廿九日 三代目從兄教親頼死に て家督を継ぐ。三河・ 丹後守護、伊勢半国守 護。応仁の乱西軍に組 す、丹後も戰場となり 荒廢。文明六年家督を 嫡子義春に譲るも同十 六年早世により又復代 長享元年次男義秀を立 てたが文明七年また討 死す。文龜元年頃府中 館に於て歿する如し。 行年七十才前後

⑤ 義春 五郎 左京大夫 文明六年丹後守護 同十六年九月四日急死 於京都邸十九才

⑥ 左京大夫 義秀 (子息が 存否?) 『陰涼軒日録』 長享元年九月廿五日条 「一色五郎殿本之周儀 侍者事也、今日入洛薄 暮出陣、馬上廿一騎人 数七八百員」これが將 軍義尚江州親征時に丹 後守護着到の模様 『晴御会部観記』 「明応七年五月二十九 日伊勢守護一色義秀於 丹後普甲山被攻国衆自 殺」 文明十七年僧院の有髮 侍者(十五才と仮定) が還俗したを抛り所と すれば文明三年頃生れ (兄義春とは四才違) 長享元年初陣は十七才 前後、明応七年討死時 は二十八才前後か。

在所与謝郡と云うも 不詳 義國 宗右衛門 天正十年本能寺変後細 川忠興室味土野に幽居 の節護衛士の一人中に 見らる

⑦ 義有 五郎 左京大夫 義季・義有は異名同人 と見做されていたが実 は父子と「田辺旧記」 「峯山旧記」三河出陣 並に掃國の条検証の結 果判つたので「文明九 年義有三河出陣し(滞 在二十五年後)明応十 年掃國の項には再めて 触れない。(本稿参照乞) 永正元年(一五〇四)頃 襲代以来若州武田元信 の丹後侵攻には寧日な く特に同三・四両年は ピークで幕府・別けて 管領・丹後守護細川政 元も武田に援軍を送り 成相寺や府中館も一時 占拠された。しかし同 四年六月遂に敵軍を逐 い払つた。同九年七月 九日府中館で病死。 行年二十六才

成願寺 一宮殿様 「丹後御檀家帳」には は三河国より御上り候 御屋方様に候まえの御 屋方様御子無く候て三 河へ御譲りにて候へ共 御内衆御集會にて竹野 郡成願寺と申し候城に 御座候(天文七年当時 の年令仮算) 永正元年(同九年の七 八年に誕生とみて三 十歳十一三才位か

吉原城主 義遠 吉原四郎兵部少輔 幕府御部屋衆、御供衆 も歴任、晩年は吉原城 に退隱の如し。

義季 『大心院記雜事録』 永正二年春の条に 「大江越中・小西石見 奉獻、越中・小西石見 奉獻、一色義季造病氣」と見、義有は逆算して 長享元年生れとなるの で明応十年は十五才で あつた。義季は三河国 生れのこの子息を連れ て掃國し健康上の都合 で襲代はなかつたと睹 らる、或はこの頃病死 とも、不詳

初代① 満範 修理大夫 明徳三年正月四日 山名氏清討取の論功賜 丹後國後父詮範遺領三 河・若狭兩國も兼任 応永十六年一月七日歿

長兄とも有 持範 次郎 式部少輔

政照 七郎 式部少輔 文明十三年 四月一日歿

政具 二郎 兵部少輔 後文龜元年 年轉式部 少輔(義 政・義清 公に仕う)

鶴壽 民部少輔 早世 於丹後討死 永正十八年 政具入道存 命

晴具 七郎 式部 少輔(義 晴・義輝公 に仕う) 天文十八年 某月一日歿

義信 如何に結び つくのか不詳 吉原城主 是が一色九郎元清と称 したと見

吉原左馬入道西雲 吉原又左衛門 天正八年細川藤孝に討 たる

藤長 七郎 式部少輔 (義晴・義輝・義昭三 代に仕ふ)義昭毛利氏 に頼つた後は各地を浪 々し本能寺変後は細川 幽齋ヲ頼り丹後に落着

細川氏旧領図説曰 竹野城一色又左衛門 一色修理大夫 義辰 昭 国 領所は竹野郡竹野川下 流辺か 芋野村「坪倉 文書」に義辰花押の段 錢仕給の發給文書在り (天文中期から天正五 年頃か)義辰は加屋の 石川繁・黒部の松田攝 津等と共に反信長派

永祿六年(將軍義輝公) 諸役人付中、外様衆在 国衆中に 一色左近大夫 見ゆ

初代①
 満範
 修理大夫
 明德二年正月四日
 山名氏清討取の論功賜
 丹後国後父詮範遺領三
 河・若狭兩國も兼任
 応永十六年一月七日歿

吉原城主
 義遠
 吉原四郎兵部少輔
 幕府御部屋衆、御供衆
 も歴任、晩年は吉原城
 に退隱の如し。

長享元年初陣は十七才
 前後、明応七年討死時
 は二十八才前後か。

義有⑦
 五郎 左京大夫
 義季・義有は異名同人
 と見做されていたが実
 は父子と「田辺旧記」
 「峯山旧記」三河出陣
 並に帰国の条検証の結
 果判ったので「文明九
 年義有三河出陣し（滞
 在二十五年後）明応十
 年帰国の項には再めて
 触れない。（本稿参照乞）
 永正元年（一五〇四）頃
 襲代以来若州武田元信
 の丹後侵攻には寧日な
 く特に同三・四両年は
 ピークで幕府・別けて
 管領・丹後守護細川政
 元も武田に援軍を送り
 成相寺や府中館も一時
 占拠された。しかし同
 四年六月遂に敵軍を逐
 い払った。同九年七月
 九日府中館で病死。
 行年二十六才

成願寺
 一宮殿様
 「丹後御檀家帳」には
 は三河国より御上り候
 御屋方様に候まへの御
 屋方様御子無く候て三
 河へ御譲りにて候へ共
 御内衆御集會にて竹野
 郡成願寺と申し候城に
 御座候（天文七年当時
 の年令仮算）
 永正元年（同九年の七
 ・八年に誕生とみて三
 十歳十一才位か

長兄とも有
 持範
 次郎式部少輔

政照
 七郎 兵部少輔
 式部少輔
 文明十三年四月一日歿
 政具
 二弟 兵部少輔
 後文亀元年
 年転式部
 少輔（義
 政・義清
 公に仕う）

鶴壽
 民部少輔
 早世
 於丹後討死
 永正十八年
 政具入道存
 命
 晴具
 七郎 式部
 少輔（義
 晴・義輝公
 に仕う）
 天文十八年
 某月一日歿

藤長
 七郎 式部少輔
 （義晴・義輝・義昭三
 代に仕ふ）義昭毛利氏
 に頼った後は各地を浪
 々し本能寺変後は細川
 幽齋ヲ頼り丹後に落着

義信
 如何に結び
 つくのが不詳
 吉原城主
 是が一色九郎元清と称
 したと見
 吉原左馬入道西雲
 吉原又左衛門
 天正八年細川藤孝に討
 たる

細川氏旧領図説曰
 竹野城一色又左衛門
 一色修理大夫
 義辰昭国
 領所は竹野郡竹野川下
 流辺か 芋野村「坪倉
 文書」に義辰花押の段
 銭仕給の発給文書在り
 （天文中期から天正五
 年頃か）義辰は加屋の
 石川繁・黒部の松田攝
 津等と共に反信長派

義清⑧
 「御檀家帳」
 石川一宮殿様に比定さ
 る。
 永正十三・四両年に亘
 る同族一色九郎相手の
 家督争いは派手に演ぜ
 られたが襲代後はあま
 り振わなかったようだ。
 天文十三年パトロン
 の石川直経父子が戦死や
 消息不詳とあるが、こ
 の殿様も共にその頃没
 落か。

一宮殿様
 御檀家帳に見える時点
 では二十歳前後の若殿
 と見受けられるが御尊
 名は何とあったのか、
 或は丹後諸旧記が述べ
 るように大永・天文頃
 当代と称される義幸で
 もあろうか。この仁な
 れば「田辺旧記」等
 は「永禄元年四月一色
 義幸隠退し嫡子義道あ
 とを継ぐ」と見える。
 そうすると天文七年、
 永禄元年約二十年当
 である、全くの覆面殿
 様で、また何等の足跡
 もない。

義道⑩
 五郎 左京大夫 永禄
 元年襲代と云う。
 「織田信長文書」には
 「同名一色七郎殿御造
 意之儀付示預之条（後
 略）
 二月廿六日信長花押
 一色左京大夫殿」
 が見え元亀元年頃に比
 定される。又「信長
 公記」天正三年の項「
 八月十二日信長越前一
 揆攻 丹後より働くの
 衆一色殿・矢野・桜井・
 大嶋等数百艘相催し浦
 々に戦ふ」と見 兎も
 角義道は最初より信長
 一辺倒であったと見受
 けられる。しかし当外
 れだったのか

五郎
 義有
 義俊
 義定
 義信
 （その他略）

石川
 一宮新五郎殿
 「御檀家帳」曰く
 御屋方様御しやてい石
 川に城持たせられ候

一説には右のとおり継
 ぐとも見
 義孝 義道
 （義幸）

持範と同人説も有
 持信
 左京大夫
 永享六年歿
 享年三十四才

初範親
 左京大夫
 伯父義實大和陣中で誅
 殺後、義教將軍より伯
 父の旧領丹後を賜う。
 けだし伯父横死後遺臣
 鎮庄には將軍の協力を
 負う。宝徳二年十一月
 二十八日頓死 行年三
 十三才

「田辺旧記」に云う。
 永禄元年（一五五八）
 義幸退隠して嫡子義道
 その後を継ぐと。教親
 死後約一〇年が経過
 しており、愚生はその
 系譜をみるかぎり、義
 孝と義道とは父子では
 なくその間二代ほど欠
 けているかと想察する